

『弟子は永遠に不肖』らしい!?



所長
エッセイ

金沢大学
がん進展制御研究所
所長 平尾 敦

2021年3月、私の所長としての任期が終了いたします。この4年間、何とか無事に職務を全うできましたこと、ひとえに皆様のご支援の賜と心より感謝申し上げます。4月からは松本・新所長にバトンタッチ。皆様、引き続きご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

4年前に「一教授」から「所長」になり、それまでと一番違ったことは、主な仕事が管理運営業務になったことです。当初は「何だか、会社や役所の中間管理職になったみたい」という感覚でした。「一教授」は、通常、他者から命令されたり、口出しされることはありません（注釈：個人の見解です）。しかし所長は、大学組織の一部局の責任者であり、当然、上司からの指導、時にはお叱りも受けます。そんな時、私は「すみません」と平謝りしながらも、内心「あれれ、この叱られている感じ、何だか懐かしいぞ。そういえば、教授になって以来、他人から叱られるなんてこと、そうそうなかったなあ〜。ずっと昔、メンターに叱られて以来だ」などと考えていました。



一般的に、メンターとは仕事や人生における「指導者」「助言者」「教育者」「理解者」「支援者」とされます。

研究の世界のメンターとは「師匠」のことです。単なる仕事上の上司とは違い、生き方そのものに影響を与える存在です。芸術や芸能のように、学術の世界においても「師匠と弟子」という特別な関係の中で研究者は育ちます。上司に叱られる度に、師匠のことを思い出していました。

小 児科医として勤務していた時の師匠である**高上洋一先生**（元国立がんセンター中央病院・薬物療法部長、聖路加国際病院／大学・特別顧問）は、「患者を治す」ことに対して際立って情熱的な先生でした。

小児科病棟の中でも、血液腫瘍を患う子供は生と死がいつも隣り合わせ、緊張感のある現場です。高上先生は、白血病やリンパ腫など悪性腫瘍の治療のため、「末梢血造血幹細胞移植術」という新しい治療法の確立に取り組まれていました。一般に、血液腫瘍の治療には強力な抗がん剤を複数組み合わせる、多剤併用療法が行われます。この治療は、効率よく腫瘍細胞を死滅させることができますが、同時に健全な血液細胞をも殺してしまいます。そこで、治療直後に、他者あるいは自己の健全な血液細胞の源となる幹細胞、つまり造血幹細胞を補充（移植）するということで血液システムを正常化させるわけです。当時、この最先端の医療を受けるために全国各地から徳島大学に患者が集まっていました。私は、病棟で最初に受け持ったのが白血病の子供だったことをきっかけに、将来は小児血液腫瘍専門医になりたいと思うようになりました。高上先生は大変強烈な個性を持った先生で、常に外の敵と闘っているような印象でした。学会で他施設の治療成績が悪いと、さっと質問に立ち「それはあなたたちのやり方が悪いからだ!」と平気で言い放ち（というか、殺気立っていて）、会場の空気を凍らせることがよくありました。一方、親分肌でグループの若手には親切で丁寧、身内からは慕われていました。私も大変かわいがっていただき、患者の診療とともに、グループ内の河野嘉文先生（現鹿児島大学小児科教授）が進めていた造血幹細胞の研究にも参加させていただきました。その後、私は、地域中核病院の小児科医、そして僻地診療所の医師としての勤務の傍ら、時間を見つけては大学に通い、研究への志向をどんどんと深めていきま

す。そんなある日、実験結果を説明していた私は、高上先生から突然、一喝されるのです、「患者(の検体)を食いものにするな!」と。



“食いもの”という表現は、「研究費目当てのいい加減な実験」に対する、先生独特の言い回しだったような気がします。また、その時の私は、(知的)好奇心がだんだん強くなり、悪い言い方をすると“興味本位”であり、患者のための医療という枠からはみ出していたのだと思います。私は「確かにそうだ、先生の言うとおりで」と素直に反省しました。もちろん、臨床でも基礎的な観点は重要ですが、先生は中途半端な私に我慢ができなかったのでしょう。そして、当時の私は若かった、どちらかを極めたいという一途な思いから悩んだ末に、「よし、自分はその“興味本位”を追求しよう!」と思うに至ったのです。先生からすれば、「オイオイ、そっちに行くのかよ」と、さぞ拍子抜けしたことでしょう。不肖の弟子は師匠の思う方向にはいかないのです。私にとっては、自分の深い部分での意思に気付かされるきっかけとなりました(注釈:今は、基礎研究から患者を治したいと思っています!)

造 血幹細胞の基礎研究をしようと決めた私に、師匠は、次の師匠を紹介してくれました。**須田年生先生**(現熊本大学国際先端医学研究機構・拠点長、シンガポール国立大学・教授)は、造血幹細胞一筋の先生で、数々の顕著な業績を挙げ続け、国際的にも有名な幹細胞生物学者です。当時の研究室は、本当に楽しかった! 研究室に入ってすぐに、ずっとこういうこと(基礎研究)がやりたかった、と思わせてくれるような環境でした。研究の知識や技術、優秀な先輩や同僚、熱気にあふれた雰囲気、今考えてもあのような環境はそうそうないだろうと思ひ出されます。須田先生は、熊本大学遺伝発生研究施設(現発生医学

研究所)、その後の慶應義塾大学医学部での研究活動を通して、私が本研究所で独立するまで面倒を見ていただいた恩師となります。先生の素晴らしい点は数々ありますが、その中でも人を惹きつける力、特に若手を惹きつける力が際立っていました。そもそも、私もそれに惹きつけられた一人でした。

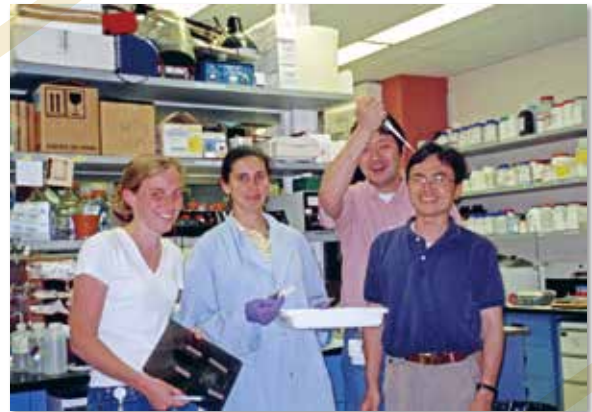


ある時、大学院への希望者の対応を、須田先生の代わりに私が担当することになったのですが、当時の私、そのあたり全くあっさりで(むしろ、学生が来たくなくなるような態度で接してしまい)、その件で大変なお叱りを受けたことを思い出します。仲間づくりがすごく大事だということ、今はすごくわかります。どうも当時の私は“素直な弟子”ではなかったようです。自分では気付かないのですが、須田先生からは、「平尾君の口癖は、“でも”なんだよね」とよく言われました。何を言っても素直に「はい、わかりました」って言わない、必ず「でも、でも」と言う、と。そう考えてみると、いろいろと怒らせたなあ、と思ひ出されます(注釈:紙面の都合上、詳細は割愛します!)。不肖の弟子は口答えをするのです。しかし、叱られる度に、自分の心と向き合い真剣に考えたこと、それが大変貴重な機会でした。



留学先の師匠である**タック・マック先生**（トロント大学オンタリオがん研究所、プリンセスマージレット病院がんセンター）は、また違うタイプです。タック先生は、1980年代、T細胞受容体クローニングという免疫学史上、燦然と輝く偉業を挙げて以来、免疫学、細胞生物学、がん生物学に関して継続的に卓越した研究成果を発表し続けています。当時、研究室には50人もの学生・博士研究員が所属しており、毎年トップジャーナルに論文を発表する世界的な研究室でした。私は「プロジェクトは自分で決めよう」と手探りで始め、少し進めてはとん挫し、それを繰り返すうちにあっという間に1年近くが経ちました。博士研究員は一定の期間で成果を挙げなければなりません。研究室には世界各地から集まった優秀な研究員がたくさん在籍しており、私の“替え”はいくらでもいます。さすがに、このままでは私の研究キャリアはここで終わり、もう研究の世界では生きていけないかも、と真剣に考え始めます。さてどうやって成果（論文）になるプロジェクトを探すか、必死に考え行動した時期でした。もう綺麗ごとや、かっこよさを求めている場合ではありません。「どうやったらサバイブできるか、その確率を上げるには?」と開き直り、それまで自分が持っていた「こうあるべき」というこだわりを捨てることにしました。もう一度まわりを見渡し、今まで避けてきた道を探ると不思議とうまく事が進み始めました。そうすると研究環境の良さも追い風となり成果を挙げることができました。その間、タック先生は、時々ふらっと来て実験の話聞き、決まって「お前は正しい方向に進んでいる!」と励ましてくれました。本当は、心配していたに違いありません。失敗することもわかっていたかもしれません。「実際に失敗して、やっとわかったか」と思ったかもしれません。不肖の弟子は物分かりが悪いのです。しかし、結果としてこの経験は、研究の世界で生きていくことの厳しさを実感しつつも、ここでやり通す覚悟を決める貴重な機会となりました。

次 世代の研究者を育てることは、研究・教育機関の最も大切なミッションです。その大事な要素として挙げられるのが「メンター」です。しかし、「どんなメンターであるべきか」という問いは大変難しく、容易に答えがでない質問です。大阪大学の仲野徹先生が書いているように、「師匠はみんな理不尽であり、弟子は永遠に不肖である」らしいですから。結局のところ、**メンターは、弟子が内面にある自身の心と正面から対峙する機会を作るのが仕事**なのだと思います。そのためには、師匠と弟子、お互いの信念や生き方、魂をぶつかり合わせられる関係性が重要です。研究は画一的なものではなく、多様で生き物のように動きます。何が正解で、何がそうでないか、メンターにもわかりません。個々の研究者が、何をやりたいのか、何を知りたいのか、時間をかけて自分の心の声に耳を傾け、自発的に決めていくしかないのです。昨今、若い世代の研究離れが問題となっています。しかし、研究の世界には測り知れないポテンシャルがあります。とことん考え抜く楽しさ、知る楽しさがあります。人の役に立つという楽しさもあります。それを次の世代に伝えることは大変大事な役目だと思います。



トロントの研究室での一コマ(右端が筆者)



You're on the right track!
お前は正しい方向に向かっている!

研究所からのメッセージ

若い世代に研究の楽しさ、すばらしさを伝える事は、明るい未来を創るための大切な投資だと思います。現在、研究所内では、クラウドファンディングなどを利用したアウトリーチ活動など、新しい取り組みの準備を進めています。

みなさん、ご協力よろしくお願ひします!